知事インタビュー

長野県の長所を生かす
全体最適への道

長野県知事
村井 仁さん

聞き手　梶本久夫　本誌編集発行人

むらい じん・1937年生まれ。1959年東京大学経済学部卒業後、通商産業省入省。1986年通商産業省を退官。同年、衆議院議員選挙で初当選。以降6回連続当選。大蔵政務次官、衆議院大蔵常任委員長、金融再生総括政務次官、内閣府副大臣（金融担当）、国務大臣（国家公安委員会委員長・防災担当大臣）、食品安全委員会担当大臣、衆議院個人情報の保護に関する特別委員長などを歴任。2006年8月長野県知事選挙で初当選。9月1日長野県知事に就任

昨年9月に就任した村井仁知事。「市町村が主役の輝く長野県へ」をテーマに、分権型社会に向けた施策を着々と打ち出している。その鍵となるのが市町村と県のパートナーシップだ。地域の自立と責任を尊重する上でユニバーサルデザインの視点に基づく住民参加は欠かせない。

市区町村との対話

就任直後から幅広い県民の意見を取り上げる活動をしているそうですね。

村井――長野県は日本で4番目に広い県なので地域ごとの独自性が強い。これをどう把握するのか難しいところです。そこで私の方から地域に出向き、全部で81人の市町村長から自由に意見や要望を聞いてきました。前知事は特定の市町村長の話しか聞かなかったために関係が悪化していました。この半年のあいだで「ボイス81」と名付けた市町村長との意見交換会を10の広域ごとに開き、ひととおりの関係修復が果たせたのではないかと思っています。

「ボイス81」で私と直接対話をするのは市町村長ですが、県議会議員、市町村議会議員、国会議員、メディア、そしてもちろん県民のみなさんにも自由に傍聴してもらいました。常に百数十人が参加していましたね。そのときの内容は、マスコミを通じてオープンにしました。もうひとつは車座集会です。名付け親は前知事で、誰でも参加でき、自由に意見を言えるという建前でした。しかし、だんだんと変質して知事が気に入った質問や話題しか出ないようになってしまった。私はこれを本来のあるべき姿に戻しているところです。県職員の声も貴重です。現場にいていろいろなことに気づいてくれる。県政についての優れた提案には、知事の表彰制度を設けています。

長所と短所の整理

そうした意見に基づき、現在中期総合計画を作成中とのことですが、特に重視する点は何でしょうか。

村井――まず考えなければいけないことは、長野県がもっている長所と短所を整理することです。長所は健康長寿日本一ということ。医療費の低さも際立っています。風光明媚な点も観光県として大きなメリットです。スキーや山登りには最適で、温泉も豊富。食べ物も美味しい。

製造業にも特色があります。長野県は戦前から戦後にかけて生糸の生産が盛んで、当時の日本の代表的な輸出品の生産拠点でした。そこで培われた生産技術が時計やカメラに引き継がれ、現在は主要産業である精密電子部品に生かされています。農業も先進的です。早い時期から葡萄酒用の葡萄を栽培しているし、りんごは生産量では青森にかないませんが、高級品種では抜きん出ています。レタスやセロリといった高原野菜も高品質で定評があります。

夏の中央アルプスと冬の南アルプス。長野県は風光明媚な自然に恵まれている

須賀川蕎麦はつなぎに「オヤマボクチ（雄山火口）」の繊維を使う。長野県の蕎麦は地域によって特色がある

短所はといえば、豊かな自然に依存するあまり、特に観光面でのホスピタリティが希薄になっていることでしょう。いいところだから放っておいても観光客が来るという意識に思わぬうちになってしまう。気候、自然、歴史といった素材や過去の評価に甘えているわけです。例えば蕎麦。信州の代表的な産物ですが、「うちは手打ち蕎麦だからうまいだろう」という意識があります。こうした発想が長野県人にはありがちです。手打ちだからうまいとは必ずしもいえません。手打ちでも上手なのと下手なのでは味が違います。

素材のよさを生かしきれていない面もあります。今は保冷輸送で長野県でも新鮮な海産物を提供できます。しかし、私は観光客がマグロの刺身を食べに来ると思えない。ところが、宿ではマグロの刺身を出さないとお金が取れないと思い込んでいるのです。そうではなくて、季節が限られた山菜や希少性の高いきのこを料理するとか、馬肉の本当に美味しいものを刺身にして出すとか、手をかけて提供すれば喜ばれるはずなのです。

真剣に観光客を呼ぶ努力が不足しているというのが率直な感想です。私は「ミシュラン」に倣って第三者評価を取り入れたらどうかと思っています。あれは非常に厳しい制度です。匿名の検査員が調査し、悪いとなると三つ星でも星を奪われてしまう。店の盛衰がかかっている真剣な世界なんですね。田舎の三つ星のレストランで食事するために、1年前から予約をしてパリから数百キロの道のりを泊りがけで来る人もいる。これからは、それくらいのレベルをめざさねばならないと思います。本当の意味でのレイティング（格付け）をどうしたらできるのか、非常に悩んでいるところです。

長野灯 明まつりでのライトアップ。長野 オリンピックを記念し、2004年から始まった。オリンピックの平和精神を後世に遺していくため、善光寺を五輪の色にちなんだ色で照らすもの。企画は照明デザイナーの石井幹子さん

ブランドは、作り手が決めるのではなく使い手が決めるものということですね。

村井――そう、ユーザーが決めるのです。そうでなければ作り手に切磋琢磨する努力は生まれません。ところが、やり方が非常に難しい。公平性を求められる行政が直接行うと蜂の巣をつついたような騒ぎになってしまう面もあります。だからこそ、第三者評価でなければならないわけです。その点、東京には「ザガットサーベイ」のレストランガイドのようなユーザーの評価を大量にまとめた例があり、私も大変興味深く見ています。

生活の基盤と環境づくり

生活整備の基盤についてはいかがでしょうか。

村井――長野県の長所を総合的に生かしていくことがこれからの長野県づくりのポイントです。基盤となるもののひとつに道路網があります。観光にしても製造業や農業にしても、安全かつ速やかに輸送するために道路は大変重要です。高速道路はひととおり整備されましたが、県道はいまだに脆弱で細かいところまでは整備できていません。都会の人には理解しがたいのかもしれませんが、地滑りや土石流といった災害は山間地では相当な頻度で起きます。県民の安全を確保するためにも、公共事業はこれからも非常に大切です。「脱ダム」が素晴らしいという意見もありますが、安全のための施設をきちんと整備しないと平穏な生活さえも送れない。これは命の問題でもあるわけです。ここを中期総合計画にきちんと位置づけていきます。

生活環境づくりについてはいかがでしょうか。

村井――ノーマライゼーションという意味で先駆的な取り組みがあります。県南の駒ヶ根市にある県立の「西駒郷」という知的障害のある人が入所する施設では、できるだけ多くの入所者に再び地域で生活を送っていただく「地域生活移行」という取り組みをしています。人間誰しも自分の能力を生かせば社会的に評価を得られる貢献ができる。知的障害の人たちも立派に貢献ができるということです。このため、積極的に各地にグループホームを整備しています。「西駒郷」の近辺はもちろんのこと、全県にわたって街の中で暮らす試みを進めているところです。

今や障害のある人々も、その能力を発揮して活躍できるような社会づくりが求められています。行政としては、そうした人々が普通に社会参加できる仕組みをつくらなければなりません。一方で、例えば聴覚に障害のある人が災害時にも十分な情報を得られるような安全に係わるシステムを整備することも大切です。

長野にノーマライゼーションの素地が発達したのは1998年の長野冬季オリンピックでパラリンピックを同時開催したことと、2005年にスペシャルオリンピックス冬季大会を開催した影響が強いと思います。障害のある人がその能力をできるだけ発揮していただくという点に関して県民の理解が進んでいるのです。このよさを生活環境づくりに生かしていきたいですね。

もうひとつ、「宅幼老所」と呼ぶ施設が長野県には多くあります。高齢になって介護が必要になっても、できるかぎり住み慣れた地域で暮らしつづけたいという願いに応えるための地域ケアの拠点です。ここでは、高齢者が自分でできる範囲で仕事を分担しながら、時には小さい子どもらも一緒になって昼間の時間を過ごしたり、あるいは共同生活を営んでいます。普通の住宅を改造したもので、通ってもらうこともあるし、寝泊りするケースもある。日常生活に近い環境で、自分なりの役割をもっていただくことで、認知症の進行を防止できる効果もあります。北欧で実践されているような寝たきり老人をつくらない取り組みにつながる発想ですね。

現在まで300ヶ所近くの「宅幼老所」が整備されています。NPOなど民間で経営しているところが圧倒的に多い状況です。整備にあたっては、国の補助も活用しながら、県では積極的に財政支援を行っています。

全体最適に向けて

海外のまちづくりで参考にすべき事例はありますか。

村井――ユニバーサルデザインの視点では、オーストラリアのキャンベラが参考になります。私は、大使館勤務の関係で、1976年から3年間滞在しました。あそこは都市計画の博物館のような場所です。馬車の時代に都市計画を導入し、それが現在の自動車の時代にも引き継がれています。歩行者と自動車が共存しているのです。例えば新しく開発された居住区の小学校の通学路は、立体交差なので子どもたちは車道を横断することなく通学できます。しかもバリアフリーが行き届いている。またその地域では車道は信号が無いので渋滞がありません。

ところでユニバーサルデザインを日本語に翻訳すると「全体最適」だとする意見があります。

村井――大変わかりやすい表現ですね。長野県も「全体最適」に向かって市町村とのパートナーシップを強化し、県民のみなさんが「住んでよかった」と心から思えるような県づくりをめざしたいと思います。

上：湯田中渋温泉郷の渋温泉では、9つの外湯めぐりを楽しめる　中：渋温泉の足湯では誰もが疲れを癒せる　下：ニホンザルの入浴で世界的に有名な地獄谷温泉

2005年 スペシャルオリンピックス冬季大会では、80を超える国や地域から選手が参加。地元にノーマライゼーションの意識が根付くきっかけとなった